放送大学研究年報　第8号（1990）55-68頁
Journal of the University of the Air, No. 8 (1990) pp. 55-68

老年期と小児性

星　　薫[*1)]

Childlikeness in Old Age

Kaoru HOSHI

ABSTRACT

Childlike behavior associated with aging is usually a phenomenon seen in a negative light. The retrogression of intellect and personality in senile dementia patients is certainly behind this. Also, the frequent childlike quarreling by non-senile elderlies in rest homes is another indicator of the negative side of childlikeness. However, when we measured the level of achievement motivation in healthy elderlies, enthusiastic about life, it became obvious that they demonstrated almost no achievement motivation, as it is measured for young people. This seems to indicate that this "zest for life" in elders is different from that in young people ; it is not aimed at the future nor based on a long-term perspective, but appears to stem instead from an ability to enjoy the present to the fullest. Perhaps this brightness and enjoyment of the present comes through as childlikeness. Futhermore, when this type of childlikeness is tied to the expressive abilities, perhaps a beauty and aliveness similar to but different from that of children is created. Examples of this which can be cited are Grandma Moses and Yaeko Nogami. They both lived to a ripe old age and their independent and active engagement in creative activities was probably related to the full display of the childlikeness (in a positive sense) in them.

「年を取ると，子供に帰る」とは，我々が日頃よく口にし，また耳にするところである．古来，「二度おぼこ」とか，「老いて再び稚児になる」といった諺も，老人の子供帰りの姿を表現するものとしてしばしば用いられてきた．小学館の「故事・俗信ことわざ辞典」によれば，「老いて再び稚児になる」とは，「老人になり，理解力，判断力などが衰えて子供

*1) 放送大学助教授（発達と教育）

のようになること．耄碌して幼児のようになること」であるという．また，柳多留の六には，「二度おぼこ，嫁は双子を生んだよう」などという，雑俳があり，幼い孫と同じように聞き分けがなく目の放せない年寄りの様子が，描かれている．お陰で嫁は小さい子供と，年寄りと両方の世話をせねばならないわけである．ここに描かれた老人は，今日的に見れば，老年期痴呆症の患者であるのかもしれない．老年期痴呆の主症状の一つに，記憶障害，知能障害，さらに，人格障害を呈する器質性の障害が含まれることは，現在では比較的良く知られるようになってきた．記憶機能の障害としては，長期記憶が，極度に阻害されるのが特徴的であると言われ，例えば，自分の誕生日，兄弟の数，自分の子供の名前などの，自分自身に関する，基本的事柄についての知識が，欠落してしまう．また，仕事上のミスが多くなったり，新しい状況にうまく対応することができなくなる，作業が鈍くなり，粗雑になってしまいながら，自分の失敗には気付かない，といった職業生活上の問題点に加え，自分の行動を知的に行うことができなくなり短絡的で，思慮の浅い，子供のような行動に走るようになるといった，知的障害もみられるようになる．対人関係の上では，相手の表情や，言葉付きから，その人の気持ちや考えを正しく推し量るといった知的機能が失われ，周囲の人間に迷惑を及ぼすことになる．さらに人格的な変様もみられ，忍耐や抑制が効かなくなる，態度や振る舞いが全体として子供っぽくなり，社会的習慣がわからなくなり，無視してしまうといったことも多くなる．例えば，人前で下着のままでいてもなんとも思わない，孫と，おやつの取り合いをして，本気で喧嘩をしてしまう，他人の家から，物を黙って持ってきてしまうなどの行動が，頻繁に見られるようになるのだと言う（長谷川，1985）．現実には，この様な老年期痴呆を病むようになる人の数は，老年人口のわずか数パーセント程度に過ぎないのであるが，人格の崩壊など，劇的な症状を示すこと，介護に人手を要すること，人生の決算期である老年期に生ずる病的変化であることなどの理由から，今日，大きな社会問題として，捕えられている．現在ほど，高齢者の数は多くなかった柳多留の時代にも，社会問題にこそなっていなかったにせよ老いて子供のようになってしまった近親の老人の姿は，悲しくも滑稽に写ったことであろう．

喧嘩にみる類似性

しかし，「老いて再び稚児になる」のは，必ずしも，老年期痴呆症の患者ばかりではない．先に列挙した行動特性は，患者ばかりでなく，市井にあるほとんどの高齢者が，多かれ少なかれ持っている特徴であると言っても過言ではない．（ただし，痴呆症患者の場合，これらの症状が時間と共に進行していくという点で，健康な高齢者とは，決定的に異なるのである）．そうであってみれば，健康な高齢者にも，程度の差はあれ，「稚児」的要素は，見出される可能性が高い．昨年我々は，[1]都内の某老人ホーム（特別養護老人ホーム）において，入所中の高齢者（97名）間に起こる様々なトラブル（主として喧嘩）について調べた．すなわち，入所者の状況について，寮母により毎日記される日誌（6月3日から7月18日までの期間）を参考資料として利用させてもらい，日誌中に散見される，入所者間のトラブルの内容につき，詳しく検討してみたのである．なお，ここに対象として取り上げた高齢者たちは，身体虚弱または身体に何等かの障害を有する者たちではあっ

たが，老年期痴呆の傾向はほとんど又は全く見られないことが，医師により確認されている．日誌によれば，入所の高齢者間には，ほぼ毎日のように何らかのトラブルが生じているという．次ぎに，その具体的な例を紹介しよう．

例1　81歳の男性と87歳の女性との間に生じたトラブル．朝食時に，食堂のサロンで，お互いの足がぶつかったことが原因で，喧嘩となり，食器を投げ合って，攻撃し合った．騒ぎに気付いた職員の介入で，ひとまずその場は治まり，81歳の男性のほうは，その日の朝食を，廊下で取ることになった．

例2　85歳の男性と66歳の男性との間に生じたトラブル．食堂のサロンにおいて，66歳の男性が，85歳の男性の奥さんにたまたまぶつかってしまったところ，85歳の男性が「俺の女房に恥ずかしい真似をするな」といって怒り出し，大声で攻撃．66歳の男性のほうは，入所間もないため，言い返すことが出来ず，黙って攻撃されるままになっていたようである．騒ぎに気付いた職員の介入で，一件落着となる．

この様に，日誌に記された，職員の関知するいざこざ以外にも，職員の知らないところで起こったトラブル，表面化していない対立などは，数知れずあるとのことである．さて，我々は，この様な，老人ホーム内に起こる多くの「けんか」を，子供の喧嘩について分析した，守屋ら（1952）の研究と対比してみたのである．守屋らは，小学校1年生から高校3年生までの児童生徒計1,917名につき，誰と，どこで，どのような理由で，どの様な方法で喧嘩をしたかを尋ね，その男女による相違，年令による変化などを調べたものである．その結果に基づき，守屋らは，子供の喧嘩の原因を，大きく3つに分類している．すなわち，1）有機的要因；生理的，身体的欲求に関連した原因．食べ物，飲み物の奪い合い，触った，つついた，押した，足を踏んだ，つねった，たたいた，蹴った，水をかけた，物や石を投げつけたなどが，これに含まれる．2）自我的要因；自己の名誉，自尊心などに関連した原因．物品の奪い合い，非難，嘲笑，悪口，罵言などにより，身体ではなく，自尊感情を傷付けられた事で喧嘩に至るもの．

3）社会的要因；他人を助けるため，もしくは，社会正義を守るために，争うことである．これら3種の原因による喧嘩の生起比率を，学年，男女の別に調べてみると，**図1〜3**に見るような，いくつかの特徴が，浮かび上がった．すなわち，a．有機的要因による喧嘩は，小学校低学年（小学3年生）までは，男女ともに，かなり大きな比率を占めているが，その後は，低下の一途を辿り，とくに女子では，高校生段階で，皆無となる．b．自我的要因による喧嘩は，男女とも，一貫して高い比率を維持している．c．社会的要因による喧嘩は，一貫して少なく，各学年とも，わずか数パーセントにすぎない．また，喧嘩の際の攻撃の方法についても，守屋らは3種に分類している．すなわち，① 暴力的方法による攻撃，② 言語的攻撃，③ 沈黙による攻撃である．**図4〜6**は，各々の生起頻度の，学年による推移を示すものであるが，男女で，少々様子が異なっている．すなわち，男子では，暴力的攻撃が，各学年とも最も多くなっている．また，言語的攻撃も，中学以降，増加し始め，高校生段階では，暴力的攻撃と，肩を並べるまでに増えている．沈黙による攻撃は，男子の場合，一貫して少ない．一方女子では，暴力的攻撃は，小学校

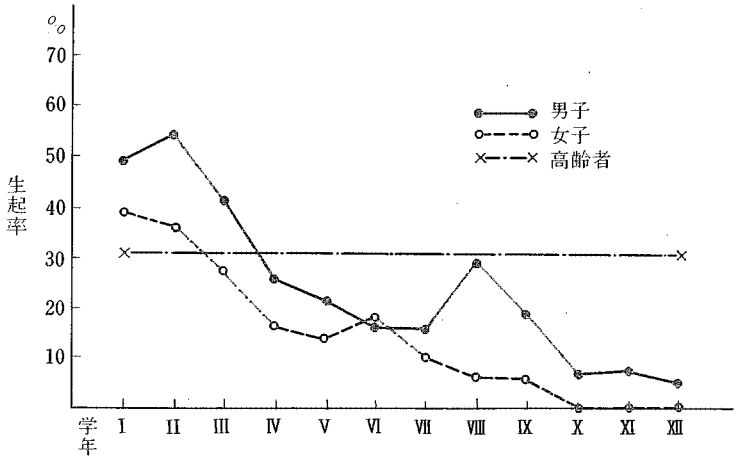

図1　有機的要因によるけんかの発生率

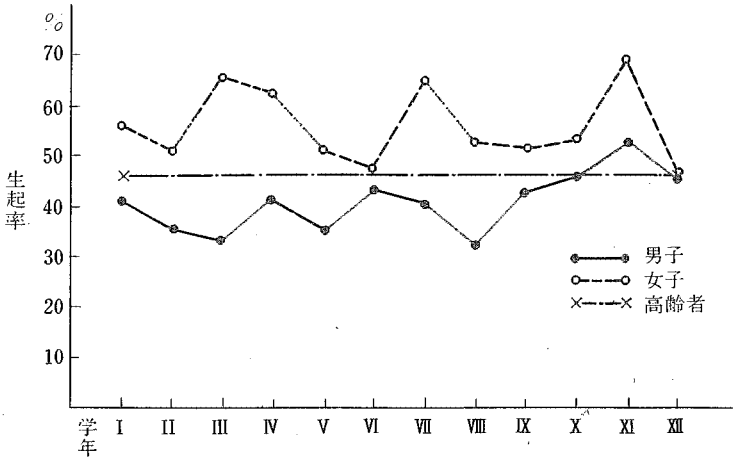

図2　自我的要因によるけんかの発生率

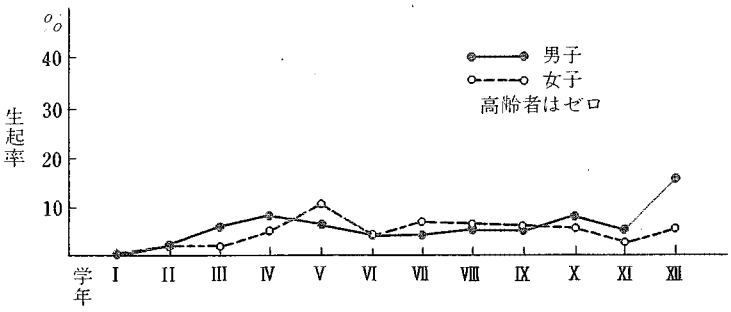

図3　社会的要因によるけんかの発生率

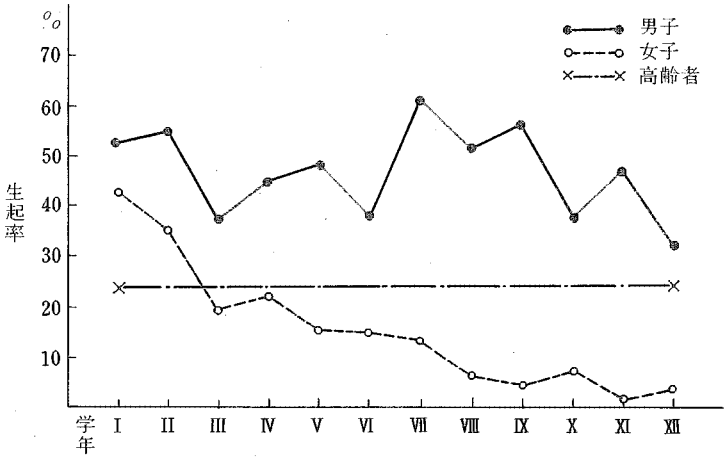

図 4　暴力的攻撃の発生率

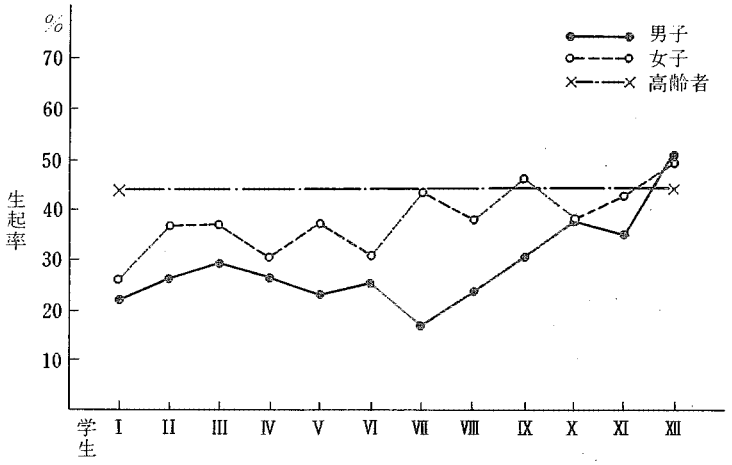

図 5　言語的攻撃の発生率

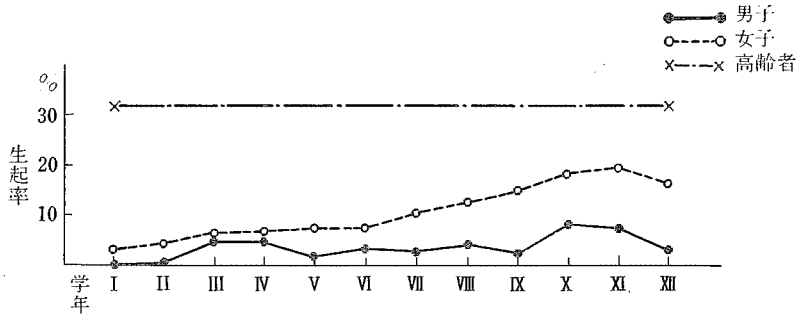

図 6　沈黙による攻撃の発生率

の一年生段階でこそ，43% を占めているものの以後，学年を追って減少の一途を辿り，代わって，言語的攻撃が，増加していく．また，男子と比べ，沈黙による攻撃が，学年と共に増加していっているのが，女子の特徴である．さて，老人ホームの高齢者のけんかを，この子供の喧嘩の諸特徴と比較し，図1～6に，同時に記載してみた．高齢者の喧嘩は，日誌中に見出された，明らかに喧嘩と認められるものだけに限ったため，また資料として利用したのが，約一カ月間という限られた期間内の日誌であったことなどの理由から例数が多くない（13件）ので，あまり断定的には論じられないが，喧嘩の原因についてみると，自我的要因が46% と，最も多くなっているものの，有機的要因も31% にのぼっており，小学校の低学年と同レベルを示している．また，社会的要因による喧嘩が極端に少ないのも，子供の喧嘩に相通じるところであろう．攻撃方法で言えば，暴力的攻撃の24% は，身体の自由を幾らか阻害されている高齢者にしては，小学校低学年女子と同レベルを示しており，高率である．また，言語的攻撃，沈黙による攻撃が多いのは，女性高齢者の比率が高いためかもしれない．ホーム職員の話しでは，苦情を含めたいさかいは，日常茶飯事であり，物を投げたり摑み合いの争いをするようなトラブルは，2週間に1回程度の頻度で起きていると言う．さらに，寝たきりの入所者同志でも，暴力的攻撃こそ出来ないものの，寮母に相手の悪口を言い合うなどの方法で，いさかいを起こしており，入所者のほぼ全員が，一回以上喧嘩を経験しているとのことであった．老人ホームという，集団生活を強いられる環境の中でのことであり，逃げ場のない環境の中であるという特殊要因はあるにせよ，体がぶつかった，悪口を言った，言われたといった理由だけで暴力的攻撃や，言語的攻撃を含む，小学校低学年レベルの喧嘩を引き起こしてしまう，高齢者の姿には，老年期痴呆症患者でなくともやはり小児的傾向が，垣間見えているように思われる．また，ここに示した老人同士の間に生じたトラブルが，老人ホームという特殊環境の故に生じたものなのか，高齢者全般に見られる傾向に由来するものなのかを知るために，健康で，子世帯と同居している高齢者についても，そこに起こるトラブルを調べてみた．[2] これは，高齢者と同居していて，その行動を最も身近によく知っていると思われる子世帯の嫁または，娘に面接して，同居の高齢者との間に最近起こったトラブルについて語って貰ったものである．次に，その例を示すが，老人ホームの場合と同様，高齢者の自己中心性が，トラブルの原因となっているケースが多く，高齢者の小児的傾向が，示されていると言えよう．

例1　会社員の娘と，その子供二人と共に暮らす77歳の女性．彼女は37年前に夫と死別し，55歳で定年を迎えるまで会社勤めをしてきた．現在は，会社勤めをする娘に代わって家事，育児に携わり，一家の中心となっていた．ある日，娘が，職場から茶菓子の饅頭を一つ持ち帰りテーブルの上に置いたままにしておいた．そこに14歳になる孫が帰宅し，置いてあった饅頭を食べてしまった．すると，彼女は，その事で，自分を除け者にしたと怒りだし，さらに家族が忘れてしまっている食べ物に関する恨みごとまでも次々と持ち出して，一週間も，愚痴を言い続けたのである．その後，この家族は，どんなに小さな物でも，必ず人数分に切り分けて食べることにしたのだと言う．

例2　長男夫婦と，その3人の子供達と同居する68歳の女性．彼女は，話好きで，世間の

こと，家族のことなど，いつも自分一人が話し手になっていたいタイプである．ある日長男夫婦が，学校行事のことで話し合っているところへ，彼女が割り込んで話し始めたため，長男が制止したところ，なぜ自分を除け者にするのだと気色ばんで，30分ほど文句を並べ立てたと言う．

これらの例を見る限り，老人ホームにおいて喧嘩が絶えない理由は，必ずしもその環境の特殊性だけにあるわけではなく，むしろ高齢者の性格的特性の中にある，自己中心性を主体とした小児性が，大きく反映していることを，忘れるわけにはいかないであろう．

認知機能に見る類似性

高齢者の認知機能に関する諸特性の中にも10歳以下の小児・児童の特性と類似点を見出し得るものが，少なくない．例えば，両者は共に，物の知覚が周囲の影響を受け易いという特質を持っている．**図7**は，埋め込み図形と言われる複雑な図形の中から，ある指定された図形を捜し当てる課題において，図形発見に要する時間を，年齢別に示したものである．図から明らかなように，10歳以下の小児・児童群と，65歳以上の高齢者群において，図形発見までの所要時間が，他の年齢群より長くなっているが，これは，周囲の不要な線に惑わされて，当該の図形に，なかなか目が向かない両者の知覚特性を示している．また知覚手掛かりをなくすために暗くされた，床の傾いた部屋に立たされた被験者に，自分の立位を垂直にするように求める課題でも，やはり，小児・児童と，高齢者とは，他の年齢群に比べて床の傾きに惑わされて，垂直からずれてしまう度合いが高くなっている．(**図8**参照．いずれの図もComalli，1970より引用)．両者に共通するこの知覚特性の，発生機序が同じであるか否かは，明らかではないものの，知覚機能が周囲からの影響に惑わされやすいという現象自体は，よく類似していると思われる．

また，現象的類似という点では，注意力に関する多くの実験データにも，両者間に類似した結果が得られている．すなわち，現実の生活の中では，同時通訳，飛行機の操縦など

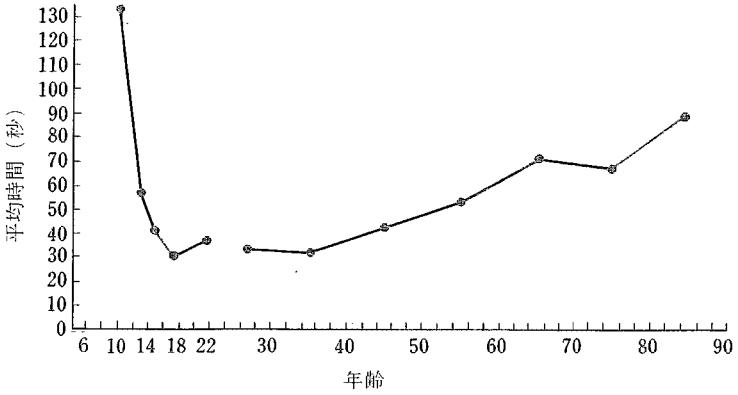

図7　埋め込み図形テストの完成に要する時間の年齢変化（*Comalli*）

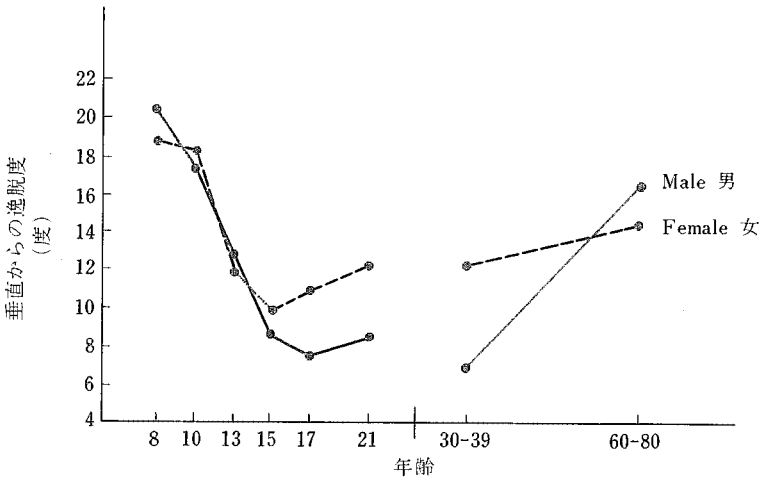

図8 傾いた部屋で、体を垂直に保つ課題の年齢別成績（Comalli, 1970より引用）

の場面で見出されるような，平行して2つ（あるいはそれ以上）の作業を同時に行うという課題を被験者に課した場合，10歳以下の小児・児童と，高齢者とは，他の年齢群に比べて，注意力の分散がうまくいかず，成績が悪い．例えば，実験室場面で用いられる課題としては，一語ずつ聴覚提示される単語のうち，同じ単語が2回提示されたものを検出するという課題を遂行しつつ，手元のキーボードをできるだけ早く叩くなどといった作業を被験者に課すものである．この場合，成人（特に若い成人）ならば，少し練習しただけで，両方の課題を旨く同時に遂行して，どちらの課題も，一つだけでそれを行ったときの成績とほとんど変わらない水準にまで引き上げることができる．ところが小児・児童および高齢者の場合は，どちらか一方の課題にしか注意が向けられず，他方の課題は，ほとんど手つかずの状態になってしまうのが通例である．日常場面にあっても，両者の注意力が持続性を欠き，散漫であるということは，しばしば，指摘されるところであり，実験結果と一致している．また我々が，ものを学習したり，想起したり，問題解決に当たるような場合，我々の頭の中では，瞬時に非常に多くの作業が平行してなされていると考えられる．したがって，我々の情報処理にあって，注意力を旨く分散できるかどうかは，当該の情報処理が成功するか否かの重要なポイントにもなるわけである．そこで，認知心理学では，注意力を情報処理能力としてとらえている．高齢者の認知特性研究では，高齢者が，加令に伴って身体的，生理学的衰退の過程を辿る中で，情報処理能力も，減少していくのではないかと推測している．（例えばCraik，1970）．一方，小児・児童の認知発達研究にあっては，情報処理能力が，成長に伴って増加していくのではないかと主張する研究もあるが，現在までのところ，必ずしも統一的結論は得られていない．

高齢者の意欲

さて，これまで紹介してきた．高齢者の中に見出される小児的要素は，いずれも，そのマイナス面を物語るものであった．確かに，老年期痴呆症患者の知的人格的退化は，それを裏付ける．痴呆には至らなくとも，小学校低学年の子供と同レベルの喧嘩が頻発する老人ホームの状況は，小児性のマイナス面を示していると言わざるを得ない．しかし，本来の子供に，プラスの特性とマイナスの特性とが共存していることを考えれば，高齢者像を語る時に，小児性のマイナス面との共通性だけを取り出して論じたのでは，片手落ちと言わざるを得ない．一昨年我々は[3]高齢者男女26名（平均年齢72歳）につき，達成動機の高さを調べてみた．対象となった26名の高齢者は，いずれも健康で，在宅で（施設入所者を含まない）あり，学歴も比較的高く（26名中，8名は大学卒，10名は女学校または旧制中学校卒，他8名は，小学校卒），何よりこの様な調査に積極的に協力しようという，積極性と，好奇心とを持ちあわせた人々であった．この中には，78歳の男性で，自ら起こした事業に，今でも意欲的に取り組む人，英語，韓国語など，5か国語をマスターして，海外旅行に行きたいと張り切る63歳の男性，体が悪くて，趣味活動には参加できないものの，毎日必ず新聞を隅々まで読み，世界の動きに大変詳しく，友人との交流も多い，世話好きな83歳の女性などが，含まれている．この様に，意欲的に生活する高齢者は，達成動機が，高いのではないかと予想して，彼等にTATとSCTとの2種のテストを課してみたのである．達成動機とは，McClellandら（1953）により，「ある優れた基準を立てて，その基準を完遂しようとする意欲」と定義された動機づけの一種である．達成動機の高い人の行動特性としては，1）適度な困難を伴う課題に，果敢に挑戦しようとする傾向が高い．2）自らの活動の成果を知りたがる．3）精力的で，斬新な手段活動を行う傾向が高い．4）自己の行った決定に対し，潔く責任を負う．などがあげられている（McClelland, 1962）．高齢者における意欲というものが，ここに挙げたような特性と軌を一にするものであるならば，両テストにおいて達成志向的な反応が，示されるものであるが，結果は，予想に反し，いずれのテストでも，達成志向的反応は，必ずしも多数は出現しなかった．例えば，ある高齢者のSCT結果の一部を次に紹介してみる．

例1	くやしいのは	バスが出ちゃった時
	私が好きなのは	主人，家族
	できれば	もっと若くなりたい
	今までは	忙しすぎた
	頼りにしているのは	主人，子供達
	残念なのは	子供が少ないこと
	これからは	のんびりしたい
	努力しているのは	回りの人に迷惑を掛けないこと
	難しい問題に出会うと	わずらわしい
	将来は	今のままで良い
	一番幸福なのは	一家団らん

例2	くやしいのは	ゲームで負けた時
	私が好きなのは	家族
	できれば	若くなりたい
	今までは	いろいろありすぎた
	頼りにしているのは	家内
	残念なのは	青春がなかったこと
	これからは	健康に注意して暮らしたいと思う
	努力しているのは	運動して足腰を強く
	難しい問題に出会うと	粘っこく頑張る
	将来は	楽に死にたい
	一番幸福なのは	健康で一杯飲んで寝る時

TATに関しても同様に，達成動機得点は，どの被験者においても一様に高くなかった。しかし，調査対象となった高齢者たちの実生活は，先に述べた通り生き生きとしており，意欲的であって決して消極的ではなかった。では，彼等の意欲の源泉をどこに求めればよいのであろうか。

達成動機によって示される意欲というのは，「将来有名な画家になるために，日夜画業に励む」とか，「世界平和を増進するために，一身を投じたいと願う」といったように，高い目標を掲げ，その目標を達成するために，長期に亘る努力を厭わない心的エネルギーであると解することができよう。しかし，高齢者の場合，「将来何者かになるために，今努力する」という考え方自体，あまり意味をなさないのではないだろうか。我々は，乳幼児期から，壮年期に至るまで，一貫して，来るべき時代に向けて，その準備を強要され続けてきている。子供時代には，良い学校に入るために，青年期には，立派な社会人になるために，社会人となってからは，恵まれた老年期を過ごすために，現在をある程度犠牲にすることを求められてきた。この様な存在である我々にとって，老年期とは，初めて，「将来のために，備えをしなくても良い時代」なのではないだろうか。従って，老年期に適応した高齢者，意欲的に老年期を過ごす高齢者とは，「現在を楽しむことを知っている人々」なのではないだろうか。堀秀彦は，老いについての，エッセイ「銀の座席」の中で，老人の快楽について，次のように述べている。

> 無駄口を叩いたり，少しばかり夢想にふけったり，将棋や囲碁を少しばかり弄んだり，好きな詩や本を読んだり，旨いものを食べたり，テレビをちょっとのぞいたり，気持ち良く昼寝をし，快く排泄したり，ふらりと出かけたり，要するに，その日その日をなんとなく快適に過ごすことなのだ．子供がおもちゃを弄ぶように，その日その時の気散じの快楽が，老人には必要なのだ。

先に紹介した，意欲的に生活する高齢者たちにしても，熱心に仕事を続けていたり，外国語をマスターしようと張り切っていたりするのは，それをすることで，将来に備えよう

としているのではなく，仕事をすること自体，外国語を学ぼうとすること自体が楽しいからその様にしているのではないだろうか．青年にとっては，将来に備えての手段にすぎないと見えるものが，高齢者には，それ自体が，楽しみの対象であり，目的であり得るということなのではないだろうか．今朝の御飯が，とてもおいしかったこと，庭の朝顔が，綺麗に咲いたことなどに，喜びを感じられるのは，老いて初めて得られる喜びなのではあるまいか．さて，将来に備えるのではなく，現前のことをただ楽しむ能力というのは，子供の特性でもあるだろう．彼等にとっては，生活の一部始終が，全部遊びである．台風一過の朝など，大人には，余分な片付けものという憂鬱な仕事ばかりが，目に付くものだが，子供には，実に楽しい朝である．晴れ渡った青空の下で，大人達が，片付けものをしているのを見るのも，大風で折れまがった木や，飛んでしまった家の屋根などを見て回るのも，わくわくするほど楽しいことである．冬の雪は，大人には，寒くて，暗くて，仕事の邪魔をする厄介者でしかないが，子供にとっては，雪の降ること自体，嬉しく，待ち遠しいことなのである．雪の降り積もった外の景色を見るだけで，表へ飛び出さずにおれない気分になり，雪を見ると，雪だるまを作らずにはおれなくなり，橇滑りや，スキーは，一日中やっていても，飽きない程楽しいものである．お祭りや，お正月が楽しいのは，もちろんだが，子供にとっては，日常の出来事の一つ一つに楽しい気分が宿っていたものである．勉強を強いられ，遊び場を失った，現代の都会の子供達にしても，その本質は，さほど変わっていないのではないだろうか．

老芸術家達の中に見る明るさ

高齢者の中にある子供と共通した，現前にあるものを楽しむ，明るさ，という特質は，表現力と結び付いた時，特有の明るい美しさとして，表出される．グランマ・モーゼス，野上弥生子という二人の老芸術家を通して，この点を次に見てみることにしたい．

1) グランマ・モーゼスの場合

グランマ・モーゼスとは，正式名を，アンナ・メアリー・ロバートソン・モーゼスというアメリカの女流画家である．彼女は1860年，ニューヨーク州のグリニッチに生まれ，1961年，101歳で死去している．また彼女は，アメリカフォークアートの第一人者であり，ルーブル近代美術館にその作品が展示されたアメリカ人画家の第一号であり，その絵が，クリスマスカードとして，3500万枚以上も売れ，画家として数多くの賞や名誉に包まれてその生涯を閉じた，稀有の芸術家である．しかし彼女は，その人生の大半の時期を，画家としてではなく，農婦として過ごし，ジャムやバターを作り，10人の子供を生み育てながら，農場の管理をして，暮らした人物でもある．彼女が絵を描き始めたのは，子供達を育て上げ，夫を看とった後，時間的余裕が生まれた75歳ごろからであった．また，それまで孫の誕生祝いに毛糸で刺繍絵を作っていたのに，リューマチで指先の自由がきかなくなったために，刺繍針を絵筆に持ち代えたのが，事の起こりであったのだともいう．その後，101歳で，現役の画家として亡くなるまでの，25年間に，1600点近い作品を生み出している．このような，彼女の経歴と，彼女の作風から，画家アンナ・モーゼスは，

いつしか「モーゼスおばあさん（グランマ・モーゼス）」と，親しみを込めて呼び慣わされるようになったのである．彼女の作風は，いわゆる素朴絵画と呼ばれる様式に属する．素朴絵画の定義は，必ずしも明確ではないが，要するに，美術学校などで，正式の教育を受けた画家の描く，洗練された知的な様式の絵に対し，自己流に描いた，どことなくぎこちなく，不器用な感じのする絵であると言えよう．しかし，素朴絵画が，人の心を打つのは，技術的未熟さ，稚拙さにも拘らず，その絵が自然で，のびのびとしており，率直で，作者の気持ちに忠実であるからにほかならず，グランマ・モーゼスの絵は，まさにその様な特徴をすべて合せ持っていると言って良いのである．グランマ・モーゼスの絵の魅力について，千足（1990）は，次のように述べている．「素朴絵画全体の中での，彼女の大きな魅力は絵に現れた生活感，季節感である．素朴画の基本は，身近な，日常的な世界を，自分なりに忠実に描こうとする姿勢にあるが，モーゼスの絵は，画家自身の生活記録，日記と言っても良いほど，徹底的に自身の生活環境に題材を取っている．彼女が，その長い生涯の大半を過ごしたニューヨーク州の小さな村イーグル・ブリッジとその周辺が，おもな題材であり，地方色の豊かさという点で，他に類を見ない．田園風景や，そこでの暮らしぶりを描いた作品は，そこでの生活を知らない者にまで懐かしさを覚えさせる．色について言えば，モーゼスが好んで使う中間色的な淡いブルー，グリーン，ピンク，白といった色は，そこはかとない郷愁と詩情を醸し出すのに，極めて効果的である．」グランマ・モーゼスの絵は，時に子供が描いた絵ではないかと思わせられることがある．描く技術が，いささか稚拙で，子供じみているということもあるが，絵に現れた「気分」が，その様に感じさせるのだと思える．つまり，彼女が描いた身近な生活の各場面からは，労働の苦しみや，生活の辛さよりは，日々の生活の中にある喜びや，楽しさばかりが伝わってくるのである．農婦としての生活は，実際には，重労働であったに違いないし，10人のうち5人の子供を失うという悲劇も経験しているにも拘らず，その絵は，あくまでも明るく，見る者をうきうきとした気分にさせる作品ばかりなのである．クリスマスや，万聖節を描いた作品だけでなく，恐ろしい火事の場面を描いた作品にまで，まるでお祭りを眺めているような陽気な明るさが漂っている．雪が降ったと言っては喜び，雪解けだと言っては喜び，皆でする干し草作りを喜び，労働の合間のわずかな休息を喜んでいるかのようである．この様に，生活の一部始終を喜び，楽しむ能力は，子供にその典型を見ることができるだろう．グランマ・モーゼスは，年老いて全ての世間的制約から解放された時，子供時代の楽しい気分をもう一度取り戻したのではないだろうか．自分の回りの生活を見る目そのものも，大人の目から，子供の目に戻り，子供時代のわくわく，どきどきした気分を，そっくり絵の中で再現したと言っても良いのではないだろうか．グランマ・モーゼスの自叙伝（1983）の翻訳者は，解説の中で彼女について，「なぜ老境に入ってから一大変換を成し遂げ，あれほどの画家になり得たのか？」と疑問を投げ掛けている．しかし，この問いは意味を成さないのかもしれない．なぜなら，グランマ・モーゼスが，あのような絵を描くことができたのは，彼女が老境に入ってからこそ可能になったことなのだからである．まだ現役の「大人」には，子供の真似は出来ても，本物の子供に戻ることは，不可能に近いといえよう．大人になって，生活が，遊びでなく日ごとの労働に変わった途端，わくわくした気分は消えてなくなり，もう，思い出すことも，希になってしまう．ところ

が，第一線を退き，いわゆる老年期に差し掛かった時，人は，まず有り余るほどの時間を手にすることになる．子供と同様に，有り余るほどの時間を手にいれ，世間的な責任から解放された時，人は，うまくすると子供時代に帰ることができるのではないだろうか．素朴画といわれる画風の画家は，数多いが，そのなかでグランマが，際立っているのは，同じ様に身近な生活を描いていても，それが，成人の，生活者の視点で描かれているものと，そこに遊び，その生活を楽しんでいる子供の視点で描かれているものとの違いであると言えるのかもしれない．さらに，我々見る者が，一様に感ずる懐かしさは，描かれてい田園風景に対する懐かしさもさりながら，自分の子供時代に対する懐かしさ，子供時代に誰もが感じた，わくわく，どきどきした気分に対する懐かしさが含まれているのではないだろうか．

2）野上弥生子の場合

野上弥生子は，言うまでもなく99歳の天寿を全うするまで創作活動を続けた稀有な女性作家である．大分県の裕福な家庭に生れ育った彼女は20歳で，習作「明暗」を書いて夏目漱石に批評を仰ぎ，今後の作家としての指針を与えられている．翌年21歳で，処女作「縁」を発表して，作家として本格的にスタートして後，あと37日で満100歳になるという昭和60年3月30日に，急逝するまで，一貫して作家活動を続け，生涯に115編の小説，322編の随筆，評論，その他全部で553編にのぼる作品を世に出している[3]．彼女の代表作として有名なのは，長編「迷路」および，「秀吉と利休」であるが，これらの作品は，どちらもかなりの高齢になってから書かれたものであり（「迷路」は，弥生子63歳から71歳までに亘って書かれ，「秀吉と利休」は，77歳の年に書かれている），彼女の衰えを知らぬ創作活動に驚嘆させられる．さらにその後も，彼女の創作活動は続き，87歳になって，長編小説「森」を書き始める．99歳で，亡くなるまでこれは書き続けられ，ついに完成を見ること無く作者の絶筆となった作品である．この小説は，弥生子の，少女時代に題材を取った，自伝風の小説であり，明治時代の，ミッション系女学校と，そこに集う裕福な女学生たちの様子が，生き生きと描かれている．作品そのものの文学的評価とは別に，この作品の中で読者が最も驚かされるのは，10代の少女の心象風景を描いた作者の筆の瑞々しさである．その具体例を次ぎに紹介してみる．

……何か悪いことをして謝っても，大人だとそのままにはすまさないわ．もう二度とするなとか，懲りたろうとかって，きっと小言がつくでしょう．でも神様だけは黙って聞いてくださるわ．どんな悪いことをしたってそうよ．だから私，うんと叱られそうなことをした時ほど内緒にしておいて，神様だけに謝ってお祈りして，お許しください，といっておくの．小学校の頃からの癖なの．……

一級うえの赤沢まつは，ちょっと姉さんぶったいい方をしながらも，手は林檎のやまに伸びていた．寄宿舎でも同じ部屋の家族らしい共同生態は，故郷からとどいたりの食べものにいとも素朴にあらわれる．誰かのものは，みんなのものであった．とりわけこの場合，指南役の小杉老女史から木刀や，くさり鎌にあしらわれて道場いっぱい跳ねまわった後の胃袋には，林檎もていねいに剝いたりするより，丸齧りにかぶりつきたいくらいなのであった．

その作品を見る限り，弥生子には，最晩年まで，知的な衰えは，微塵も感じられない．と同時に実に，初々しく，また無邪気さに溢れた文章が，この「森」という作品には，溢れているのである．このような，感性の若々しさは，90年以上保たれていたといった性質のものであるよりは，彼女が高齢に達し，老年期に適応する中で，子供時代の気分を再び呼び起こすことができたからこそ，持ち得たものなのではないだろうか．高齢に達したからこそ，グランマ・モーゼスがあのような絵を描くことができたのと同様に，弥生子が，「森」を書くことができたのは，彼女が90歳代に達していたからこそなのではあるまいか．

ここに紹介した老芸術家たちのような，特殊な才能には，恵まれないとしても，高齢に達して大人の時代には忘れかけていた子供の持つ明るさ，無邪気さを呼び戻すことが出来るなら，祖父母は，幼い孫たちの最も良き理解者になれることであろう．親達以上に，子供達と，喜びや，驚きを共有できるだろう．一昔前まで，囲炉裏端で，子供達に昔語りを語って聞かせるのが，常に老人たちの役割であり，子供向けの冒険物語の主人公が，しばしば「お爺さん」であるのは，決して両者が，共に生産役割から排除された存在であるということのためばかりではないのである．

注

1) 平成元年度放送大学「発達と教育」専攻卒業生佐藤裕子氏の卒業研究報告書より引用.
2) 平成2年度放送大学「発達と教育」専攻卒業生白鳥愛子氏の卒業研究報告書より引用.
3) 昭和63年度放送大学「発達と教育」専攻卒業生北川千佐子氏の卒業研究報告書より引用.
4) 昭和63年度放送大学「発達と教育」専攻卒業生杉山和子氏の卒業研究報告書より引用.

引用文献

長谷川和夫（編） 老年期痴呆 金原出版 1985
守谷光雄，山崎正，田中熊次郎 著 子供の道徳 金子書房 1952
Comalli, P. E., Jr. Life-span changes in visual perception. In Goulet & P. B. Baltes (Eds.), Life-span developmental psychology : Research and theory. Academic Press 1970
Craik, F. I. M. & Byrd, M. Attentional resources and cognitive deficits. In Craik, F & Trehub, S. (Eds.) Aging and cognitive processes. Plenum. 1982
千足伸行（監修） グランマ・モーゼス展カタログ 日本テレビ放送網 1990
加藤恭子（訳） モーゼスおばあさんの絵の世界：田園生活100年の自伝 未来社 1983
野上弥生子 著 森 新潮社 1985

（平成2年12月22日受理）